

\* 登場人物

大友啓介（57） ……ペンションの主人  
大友京子（52） ……啓介の妻  
志摩健次郎（29） ……ペンションの客  
藤岡元常務（57） ……かつての同僚

\* あらすじ

大友啓介は破綻した某名門銀行の銀行マンだった…。派閥争いに敗れ、エリート意識も抜けないまま銀行を追われた啓介は、花の咲く丘で有名な小さな町で、ペンションの主人として妻・京子と共に新しい人生を踏み出していた…。

ある日、そんな啓介のもとに東京から志摩という客がやって来る。旅の果てにここを訪れ、花の咲く丘を彷徨う志摩…。彼もまたどこか影を抱えた若者だった…。

そんな折、啓介のペンション付近に挙動不審人物が現れると言う噂が立つ。ある夜、その人物が現れ、啓介が追ったものの逃げられてしまう。思いもかけない事件の発生に、啓介は、自分のペンションに滞在している志摩との関連に疑惑を募らせる…。

ある夜、地元の居酒屋で『花の丘祭り』実行委員会のメンバーと酒を飲んでいた啓介はカウンターに座る志摩の姿を見つける。予てからの疑惑を問いたさそうと、志摩に詰め寄る啓介だったが、まさしくその時、あの不審

人物が居酒屋に現れた。その男の正体は…、かつて啓介が派閥争いを繰り広げたライバルの藤岡常務だったのだ。銀行が破綻し、人生の意義と家族も失った藤岡は、かつてのライバルに心の救いを求めて来たのだった…。

そんな藤岡を励ましたのは、彼と同様に自分自身から抜け出せずにいた志摩だった。彼は交通事故で幼い命を奪い、その呵責から仕事も恋人も捨て、ここに逃れてきたのだった。この丘の景色が小さな自分と自分自身を許す勇気を与えてくれたと藤岡を励ます志摩…。

翌日から啓介のペンションに『花の丘祭り』の日の予約が殺到する。かつて脚光を浴び、今は行方をくらましていた有名ピアニスト志摩健次郎が復帰リサイタルを開くというのだ。志摩の姿を探して丘に向かう啓介と京子。そこに志摩の友人と名乗る若い女性も現れ、3人は志摩のいる丘に歩いて行くのだった…。

「いつか、花の咲く丘を越えて…」

多田清人

鳥の轉る声。  
小道を歩く足音。

N (啓介の声) 「私は大友啓介…。丘を埋め  
尽くす花の縮模様に有名なこの町で、妻  
と共に小さなペンションの主人をしてい  
る…。実は私は昨年まで北海道の有力銀  
行の銀行マンだった。私のような銀行マ  
ンがペンションの主人という意外な転身  
をしたのは、知人に頼まれたことと、銀  
行という古い体質の派閥争いに敗れ去っ  
たからだ…。勝ち組に銀行を追われた私  
はエリート意識も抜けず、挫折を抱えて  
空虚な毎日を過ごしている…。その銀行  
も先日、バブル経済の崩壊とともに破綻  
してしまつた…。私の人生はいったい何  
だったのか…。そんな問いかけに答えも  
見つけられず、私は毎日を過ごしてい  
る…」

ドアの開く音。

啓介「ただいま…」

京子「あら、お帰りなさい、早かつたのね…。  
どう？祭りの打ち合わせは順調にいつた  
の？」

啓介「ふんつ、適当な口実を付けて抜け出し  
てきよ。まったく…。アマチュアバンド  
のコンサート開くんだとさ…。田舎じみ  
ているよ。有名人でも呼ぶと言うならと

もかく、そんなことでここに来る観光客  
がいると思うか？何が『花の丘祭り』だ  
…。」

京子「でも、あなた、花の丘しかない町なん  
だから、お祭りで少しでも盛り上げよう  
とみんな頑張っているんじゃない」

啓介「そんなこと言つたつて、今年の祭り期  
間の予約入っているかい？」

京子「それは…」

啓介「それなら、結局は自分たちの独りよ  
がりなんだよっ！ちつぽけな過疎の町で  
みんなが肩寄せ合つて、いったいどうな  
るつて言うんだっ」

京子「ちつぽけでも肩寄せ合つてるところ  
が良いんじゃない。そう考えることが出  
来ないの？」

啓介「私には出来ないねっ！」

京子「もうっ！もう少しここに愛着を持てな  
いのかしら…。あつ！そうそう、信組の  
高橋さんから電話があつたわよ…。ねえ、  
きつと融資の件じゃない？うまく行けば  
いいけど…」

啓介「いいや…。今の状態じゃ追加融資には  
応じない気だよ。私には判る…。あの高  
橋とかいう若い担当者、抜本的な経営改  
革案を提示しろ言つていた…。いったい  
私を誰だと思つているんだっ！私は彼が  
一生扱わないような取引を手がけてきた  
んだぞ。名門銀行の幹部だったんだ…」

京子「あなたはもうここの社長なのよ…。こ

こで新しい人生を始める決心をしたんで  
しょ？」

啓介「ああつ、判つているよっ」

N 「ご多分に漏れず、私のペンションもこの  
不景気のおおりに受けて、経営状態は決  
して良くない。金融機関の融資で何とか  
繋いでいるのが現実だ。銀行マンだつた  
ころは中小企業の融資をうち切つて、い  
くつもの会社を潰してきたことを思うと、  
今の自分の惨めな立場を素直に受け入れ  
ることなんて出来ない…」

鳥の轉る声。(日替わり)  
階段を啓介が降りてくる。

啓介「おおい、京子」

京子「はあゝい。なに？」

啓介「今日のお客さんは東京の志摩さんだ  
ろ？もうつく頃なんだが…」

京子「そうね、どこか寄り道でもしているの  
かしら？」

啓介「ああ…。ちよつと迎えに行つて来よう  
か。いったいどこを寄り道しているんだ  
…」

京子「丘の景色に見とれているんじゃないか  
しら？今日は天気もいいし…。みんなち  
よつと車を停めて記念撮影なんかしてい  
るみたいよ」

啓介「暢気なこと言うなよ。めつたに出来ない

客が途中で事故にでも遭っていたらどうするんだ」

N「私のペンションには時々、都会からふらりと若者がやってくる。この町の丘に感動して住んでみたいという者もいるが…。実は、私は北海道の生活に憧れるような若者の心境は理解していない…。丘の模様彩る美しい町だが、季節が終わればただの過疎の町だった。ここに住みたいと望む者は何か…、そう挫折を抱えた者なのだ…。私のように…」

小鳥の囀る声。

丘の小道を歩く足音。

農婦「おはようっ！お兄さん、一人旅かい？」

志摩「えっ？ええ…」

農婦「どうだい？この丘が気に入ったかい？」

志摩「ええ、まあ…。今年は綺麗な花が咲きそうですね」

農婦「そりやそうさ！あたしが手入れしているんだ。今年もこの丘を見にいっぱい観光客がやって来るよ。あんたも一人じゃなくって、彼女と一緒にこなきやつ！」

志摩「ふふ、恋人ですか…。みんな何故ここにやって来るでしょうね…」

がここに来たのと同じさ。この丘には不思議な魅力があるんだよっ。あはは…」

志摩「（呟いて）僕が今、ここに理由と同じですか？」

ドアの開く音。

京子「いらっしやい。あら、もしかしたら志摩さんでしょうか？」

志摩「ええ、今日からしばらくお世話になります…」

京子「はい、判りました。ゆっくりして行ってくださいね。…実は着くのが遅いので心配していたんですよ」

志摩「ちよつと途中で寄り道をしてしまいました。丘の花があんまり奇麗だったものですから…」

京子「良いんですよ。うちに来るお客さんは良くそう仰るんです」

志摩「そうですか…。これ、ピアノですね？誰か弾かれるんですか？」

京子「いいえ…。昔私がかじった程度で…。恥ずかしいわ…」

啓介がやってくる。

啓介「京子？誰か見えられたのかい？あつ、いらっしやい！」

京子「あなた、こちら東京の志摩さんよ。今、御着きになったわ」

啓介「それはどうも。どうかゆっくりしてってください。花の丘以外はこれといった物なんてありませんが、静かで落ち着いた所ですから…。今夜はちよつとした歓迎パーティーを考えていますから、是非、他のお客さんと一緒に…」

志摩「あつ、あの…。せつかくですが…」

京子「えっ？」

志摩「少し一人で過ごしたいんです。今夜は食事も結構ですから…」

啓介「…そうですか。残念です。それじゃ、早速、お部屋の方にご案内しましょう」

志摩「どうも…」

N「その志摩という若者はそう言ったきり、部屋に引きこもってしまった…」

皿を洗う音。（日替わり）

京子「ねえ、あなた。最近この辺で嫌な噂が立っているの知ってる？」

啓介「えっ？嫌な噂？どんな噂だい？」

京子「それがねえ、挙動不審の男の人がいるんだって。コートを着て帽子を深く被って、サングラスにマスク…。数日前から見た人がいるんですって。怖いわ…」

啓介「コートを着て、サングラスにマスク…。そりや、変質者だよ！そういうヤツが女性の前で…」

京子「…あなた」

啓介「…こう物陰からいきなり現れて、コートを広げるとだね…」

京子「ちよつと、あなたつ！やけに詳しいじゃない。まさかあなたじゃないんでしょうね？」

啓介「ばかっ！僕のワケ無いじゃないかっ！」

京子「でも、心配だわ。小学生の子供のいる家なんか大変でしょ」

啓介「この付近に変質者が出るなんてなったら商売に差し支えるから。警察によく見回りをして貰うように頼んで、あまり大騒ぎしない方がいい…」

N「京子は挙動不審人物の話を本当に心配しているようだった…。私達の間には子供はいない…。銀行マンとして仕事一筋だった私は、夫婦の間に子供が出来なかったことも、そのうち何とかなるさくらいにしか考えていなかった…。やがて子供のことは諦めた私たち夫婦だったが、京子はそのことをどう考えているのかふと気になることがある。そんな時、私は決まって、京子にすまない気持ちでいっぱいになるのだった…」

鳥の囀る声。(日替わり)  
遠くでピアノの弾く音。

N「その日の午後、外出先から帰った私は、

自分のペンションからピアノの音色が聞こえているのに気づいた…」

ドアを開けて啓介がやって来る。

啓介「あつ、志摩さん…」

ピアノの音色が止まる。

志摩「ああ、社長さん…」

啓介「せっかく弾いていたところを止めさせてしまつてすいません。どうですか？夕べはゆっくりと休まれましたか？」

志摩「ええ、おかげさまで…」

啓介「いやあ、それにしても大した腕前ですね。驚きました…。あなたはピアノを弾くんですね…」

志摩「ほんの触り程度ですけど…」

啓介「いいえ、とんでもない！プロ並じゃないですか…。以前は音楽関係の仕事をして？」

志摩「ええ、まあ…。こうしてここで丘を眺めていると、もう弾くまいと思つたピアノも懐かしく思えてきたんです。…ねえ、社長さん。昨日、あの丘で手入れのおばさんと話したんですけど、どうして人はここ景色に惹かれるんでしょうか？丘の花が奇麗だからでしょうかね？」

啓介「さあ、どうしてでしょうかね…。何かを抱えた人間に、青い空と色鮮やかな縞模様

様が希望を与えるのかも知れません…。志摩さん、実は、私は一年前までサラリーマンだったんですよ。今、なぜこんなペンションの主人に納まつているかと言うと、友人に頼まれた事もあるんですけどね。私は負け組なんですよ…」

志摩「負け組？」

啓介「ええ、古い会社によくある、いわゆる派閥争いですよ。ライバルは勝つて重役の椅子に座り、負けた私は会社を去つた…。ただそれだけなんですけどね。そんな時、ここで見た丘の景色が…。こんなんでいうか雄大だったんですよ。花の縞模様が空に溶け込んで、何事も小さく見えたつて言うか…」

志摩「そうですか…。社長さんにもそんな事情が…。社長さん、このピアノ、また僕に弾かせてもらえますか？僕にはまだやり残したことがあるような気がして来たんです…」

啓介「やり残したことですか…」

N「私は志摩氏にそれ以上理由を聞かなかつた…。彼は静かにピアノを弾き初めた…。ピアノを弾く志摩氏をフレームに納めたペンションの窓枠…。その向こうで丘の縞模様が色づき始めていた…」

テレビのニュースが流れる(夜)

京子「そう…、あの志摩さんってお客さんと  
そんな事を話したの…」

啓介「ああ…」

京子「でも、あなたは負け組なんかじゃない  
わ。こうして新しい生き方に向き合っ  
ているんだもの。ここを始めたとき、あな  
たは言ったわね。挫折からの再出発だっ  
て。志摩さんも何かを抱えているなら、  
上手く解決してくれるといいわね…」

啓介「ああ…」

N「実は、私は知っているのだ…。志摩とい  
う若者の前ではこの丘のせいだと言った  
が、負け組が立ち直れたのは、妻である  
京子のおかげだった…」

京子「ねえ、あなた…。志摩さんが何かを乗  
り越えるよう、ここで良い時間を過ごし  
てもらいましょう」

啓介「ああ、そうしよう…」

N「そんな時だ…。京子が窓の外を見て怯え  
たような声を出したのだ…」

京子「…ねえ、あなた。誰かいる…」

啓介「ええっ？誰かって？」

京子「ほら、前庭の木の陰よ…。ほら！近所  
で噂していた拳動不審者よ！きつと…」

N「確かに京子が聞きつけていたとおり、そ

の男はコートを着て、帽子とサングラス  
とマスク…。素性を隠していることは間  
違いないと言った様相だった。私は咄嗟  
に手近なもの持って外に飛び出した  
っ！」

ドアが開く音(数十分後)

啓介「ただいま…」

京子「お帰りなさいっ！あなた心配したわ  
っ！大丈夫？」

啓介「ああ…。残念だけど、男に逃げられた  
よ。しかし残念だったなあ。もう少し  
のところ捕まえることが出来たのに  
…」

N「その時、京子の視線が、私が右手に握っ  
た靴べらとズボンの膝に注がれているの  
が判った。膝にはくつきりと…。ドロ染  
みが…。私は日頃からこの妻を娶って浮  
気は出来ないと思う。京子は観察力が鋭  
いのだ…」

京子「そう？あなたが手にしたのが靴べらじ  
やなかったら捕まえられたわよ…。でも、  
あなたが無事で本当に良かった…」

啓介「心配したのかい？」  
京子「当たり前じゃない！」

N「私は日頃からこの妻を娶って、窮屈には

感じていない…」

鳥の囀る声(翌日)

N「翌日、連絡を受けた警察官が一応、事情  
を聞きに来た。この近辺で同じような男  
を見かけたという話があったそうだ…。  
警官から誰かに付け狙われるような覚え  
がないかとも訪ねられたが、見に覚えな  
どあるはずもない…。それ以上の進展も  
なく、警官は巡回を強化すると言って去  
っていった…」

京子「…でも、怖いわ。あの男の人、家の様  
子を伺っていたような気がするの。私達、  
誰かに監視されているのかしら…」

啓介「そんなことあるわけじゃないか。  
(ふと)まさか…」

京子「まさかって？何か心当たりでもある  
の？」

啓介「まさか、あの志摩ってお客が…」  
京子「ちよつと何言ってるの！あの人があんな  
ことするわけ無いじゃない。それにこ  
の前ここに来たばかりでしょ」

啓介「でも、他に心当たりがあるかい？きつ  
と彼がここにやっ来て来た事情に関係があ  
るんじゃないかな…」

京子「あなた、いいかげんにして。お客さん  
に失礼よっ」

啓介「そうか…。そうだな…」

N「妻の前では納得したそぶりであったが、私はどこか陰のある志摩という若者にあらぬ疑いの目を向け始めていた…」

演歌が流れる居酒屋（同夜）

N「その夜、親しい仲間が近くの居酒屋に集まった。『花の丘祭り』に向けた打ち合わせと称して、酒を飲むのだ」

ガラガラと戸が開く音。

啓介「こんばんは…」

主人「いらつしやい！皆さん来ていますよ」

仲間A「大友さん、さあ座つて。早速だけど、アマチュアバンドのコンサートの件なんだ。一応、3組の申込があつたんだが…」

啓介「…この『ピンクキラーズ』ってバンドは、いったいなんて曲を演奏するんだ？」

仲間A「えつと…、『恋人よ、いつか花の咲く丘を越えて』だとさ…」

啓介「なんだか演歌みたいだな？」

仲間A「いいやハードロックだな…。あれは…。MDがここにあるぞ。聞いてみるか？」

啓介「いいよ。酒がまずくなりそうだな」

仲間B「あつ、そうそう、あの人来ているよ」

啓介「えつ？あの人って？」

仲間B「ほら、大友さんの所のお客さんだろ」

N「ふと目を向けると、あの志摩という若者がカウンターの席に腰掛け、静かに酒を飲んでいた…。例の挙動不審者の一件以来、彼に疑惑を寄せる私の視線が気になつたのか、目が合つた瞬間、彼は訝しげな視線を私に返してきた…」

演歌が流れる（数時間後）

N「祭りの打ち合わせも一区切りついて、みんな勝手に話し込んでいる。いささか酔つたせいもあったが、私は志摩という若者に例の挙動不審人物の件を聞いたはずにはいられなくなつていた…」

啓介「志摩さん。隣の席、いいですか？ちょっと話をしませんか…」

志摩「ええ、どうぞ。ちようど話し相手が欲しいと思つていたところなんです。社長さん、どうかしたんですか？改まつて…」

啓介「実は最近、家の近くで挙動不審人物が現れる事件があつたんです…」

志摩「そうだったんですか。それで警察の人が来ていたんですね？」

啓介「ええ…、それでお聞きしたいんですが、志摩さん、あなたその人物に…」

戸がガラガラと開く音。

N「私が志摩氏に不審人物の件を切り出そうとした、その時、店の入り口が開いて、まさしくあの挙動不審人物が店にやつてきたのだ。その男は、店内にいた私達を見つけて、慌てて外に逃げ出そうとした」

啓介「ちよつとあんたっ！待てっ！」

N「私の様子を見た志摩氏がすばやくその不審人物の腕に掴みかかった」

不審者「は、放せっ！放してくれっ！俺は何もしてないっ！」

啓介「そんなことないだろう！あんた俺の家を覗いていたろう？そうじゃないか？」

不審者「それは…、別に…」

志摩「あんた、いったい誰なんだ？顔を見せろっ！」

N「志摩氏はちよつと強引だったが、その男のサングラスを剥ぎとつた。そして私が見たその顔は…」

啓介「お前は藤岡…。藤岡常務じゃないか」

っ！」

N「挙動不審の男は、私がかつて銀行で派閥争いを繰り広げた、ライバルの藤岡だった。私は…、今になってこの男と再開するとは夢にも思わなかった。彼との派閥争いに敗れた私は銀行を辞めて、ここに妻とともにここにやってきたのだ。それにしても…」

静かに演歌が流れる（少し後）

N「私たち3人は居酒屋のカウンターで酒を飲んでいた…。祭りの仲間も帰って、店内には私たち3人だけが残っていた…。私が酒を注ぐと藤岡は何も言わずに酒を飲んだ…。それにしても、藤岡の奴、老けたな…。権力争いに勝って重役の椅子に深々と座った姿が奴を見た最後の姿だった…。今、隣で酒を飲む彼は、白髪と顔に刻まれた皺で一層、老けて見えた」

啓介「…いったいどういうつもりだったんだ？こんなところまで来て…」

藤岡「（ぼつんと）大友…、おまえはどうして今みたいな生き方を始められた？銀行を辞めた後、おまえはどうやって新しい人生を見つけたんだ？教えてくれ…」

啓介「別に…、これといった答えはないよ。」

女房と話してね、銀行の時みたいな慌ただしい生活は止めにしよと決めたんだ…」

藤岡「それだけか…？」

啓介「ああ、それだけだ…。何か特別な秘密でもあったと思っただか？」

藤岡「大友、俺にはな…、俺には何も無い」

啓介「どういう意味だ？何もないって…」

藤岡「おまえが去ってまもなく銀行が破綻したろう？原因は俺なんかに関りようもないところで作られていたんだ。会社が無くなって放り出された…。そうしたら、毎日、何をしたら良いかさえ判らない自分に気付いたんだ…」

啓介「藤岡…、お前…」

藤岡「俺は会社という小さな世界でしか自分の存在を確かめられない人間だったんだ。今、やっとそれが判った。だからお前に聞きたかったんだ。俺の何が悪かったのかを…。だから付けまわすようなまねを…」

啓介「家族は？お前にも家族がいるだろう？」

そんな時こそ家族が…」

藤岡「女房とは別れたよ…。女房には銀行を追われた俺に興味が無いらしい。もっとも仕事一筋だったから、気持ちには判らんくはない。俺は家族というものを育てて来なかったんだ…」

N「藤岡はそう言って淋しそうに笑っていた…。すると、そばで黙って耳を傾けていた志摩氏が藤岡に話しかけた」

志摩「藤岡さん。これからじゃないですか。

実は僕も以前の自分から抜け出せないままここにやって来たんです。僕は…、あの…、前に交通事故を起こして、幼い子供を死なせてしまいました。その子の両親は苦しんだ末に僕を許してくれると言ったんですが、それからというもの自身、自分が嫌になって…。自分自身を許せなかったんです…。仕事も恋人も置き去りにしてここまで来た時、あの丘を見たんです。この丘の景色が小さな僕自身と自分を許す勇気を教えてくれたんだと思います…。藤岡さん、あなたにもきっとそんな時が来ます。だからもう一度、頑張りませんか？」

藤岡「（ぼつんと）小さな自分か…。そうか、この丘が君に自分を許すことを教えてくれたのか…。（啓介に）大友、お前の家から見えた丘は本当に奇麗だったよ…」

N「京子が言っていた…。ここは挫折を抱えた人間が新しい人生を見つけた場所だ…。確かにそうだ…。私は負け組だった過去を…、志摩氏は幼い命を奪った過去を…、それぞれが過去を乗り越えて新し

い人生を見つけたのだ…。藤岡にも何か  
がきつと見つかるだろう…」

丘を歩く啓介の足音（翌日）

N「昨夜、藤岡には、私のペンションに泊ま  
って貰った。今朝は良い天気だ。朝日に  
丘の縞模様を眩しいくらいに映えている。  
志摩氏の言葉のように、藤岡の目に新し  
い何かを与えて欲しいものだ…」

ドアを開く音。

電話を取っていた京子が受話器を置く。

啓介「ただいま…」

京子「あつ、あなた、大変よ！朝から予約の  
電話が鳴りっぱなしなの」

啓介「そんなに予約が？いったいどういう訳  
だ？」

京子「それが予約が全部、『花の丘祭り』の  
日なの…」

啓介「この祭りの日？今年も変わり映えは  
しないんだが…」

京子「それがね、予約する人がみんな有名ピ  
アニストの復帰リサイタルがあるんでし  
よって聞くのよ。インターネットの情報  
らしいわよ…」

啓介「有名ピアニスト？そんなイベントがあ  
るなんて聞いていないな。僕も祭りの実  
行委員だけ…」

N「その時、ふと外の丘を見た私は、いつか  
ラウンジの窓に収まっていたピアノを弾  
く志摩氏の姿を重ねていた…」

啓介「あつ！」

京子「あつ！って何？」

啓介「志摩さんだ！彼はどこだ？」

京子「あら、志摩さんなら丘を歩いて来るっ  
て出かけたわよ。あなたは遭わなかつ  
た？まさか…、その有名ピアニストって  
…」

啓介「丘に行ってみよう」

N「私と京子は連れだつて丘に続く小道を歩  
いた。ふと、ペンションの方をふり返る  
と、藤岡の部屋の窓が開かれ、あいつが  
丘の景色を眺めていた…」

啓介「何が見つかったかな…」

京子「何が？藤岡さんがどうかしたの？」

啓介「いいや、何でもない…」

小道を歩く別の足音が近づいて来る。

若い女「あお、ここの方ですか？」

啓介「えっ？ええ、まあ…」

若い女「この付近に志摩健次郎という人がい  
らっしゃるって聞いたんですけど、ご存  
知ありませんか？」

N「その若い女性は少し恥ずかしそうに私達  
に声をかけてきた…。そして私と京子は  
顔を見合わせ、微笑んだ…」

啓介「お探しの方なら、きつとこの丘の向こ  
うにいると思いますよ…」

京子「もし、よろしかったら、ご一緒しませ  
んか？私達もその人に会いに行くんです  
よ」

若い女「本当ですか？もしかしたら彼のお知  
り合いの方ですか？私、志摩さんの友人  
で…。ご一緒させてください…」

啓介「ええ、ご一緒しましょう…」

N「きつとあの若者にも新しい人生が始まっ  
たのだ…。この丘で、何かを抱えた  
人々が、自分に向き合い、過去を乗り越  
え、新しい生き方を見つけていくのだ。  
私達夫婦がそうだったように…」

おしまい